# 三輪の麻糸

楠山正雄

# 一

むかし神代(かみよ)のころに、大国主命(おおくにぬしのみこと)の幸魂(さきみたま)、奇魂(くしみたま)の神(かみ)さまとして、この国(くに)へ渡(わた)っておいでになった大物主命(おおものぬしのみこと)は、後(のち)に大和国(やまとのくに)の三輪(みわ)の山にまつられになりました。さて、その山を三輪山(みわやま)というについて、こういうお話(はなし)が伝(つた)わっています。

ある時(とき)大和国(やまとのくに)に、活玉依姫(いくたまよりひめ)という大(たい)そう美(うつく)しいお姫(ひめ)さまがありました。

この活玉依姫(いくたまよりひめ)の所(ところ)へ、ふとしたことから、毎晩(まいばん)のように、大(たい)そう気高(けだか)いりっぱな若者(わかもの)が、いつどこから来(く)

るともなくたずねて来ました。そのうちに、とうとう若者は、お姫さまのお婿さんになりました。

間もなくお姫さまには子供が生まれそうになりました。ところで、そのお婿さんははじめから、夜おそく来ては、夜の明けないうちに、いつ帰るともなく帰ってしまうので、お姫さまのほかには、だれもその顔を見知ったものもありませんし、どこのだれだということは、お姫さますら知りませんでした。

## 二

お姫(ひめ)さまのおとうさまとおかあさまは、ふしぎに思(おも)って、どうかしてそのお婿(むこ)さんの正体(しょうたい)を見届(みとど)けたいと思(おも)いました。そこである日お姫(ひめ)さまに向(む)かって、

「今夜(こんや)お婿(むこ)さんの来(く)る前(まえ)に、部屋(へや)にいっぱい赤土(あかつち)をまいてお置(お)き。それから麻糸(あさいと)を針(はり)にとおしておいて、お婿(むこ)さんの帰(かえ)るとき、そっと着物(きもの)のすそにさしてお置(お)き。」

といいつけました。

お姫(ひめ)さまはその晩(ばん)いいつけられたとおり、大きな麻糸(あさいと)の玉(たま)をお婿(むこ)さんの着物(きもの)のすそに縫(ぬ)いつけておきました。

あくる朝(あさ)見(み)ると、麻糸(あさいと)の先(さき)は針(はり)がついたまま戸(と)の鍵穴(かぎあな)を抜(ぬ)けて、外(そと)へ出ていました。そして麻糸(あさいと)が引(ひ)かれるにつれて、糸巻(いとまき)はくるくるとほぐれて、もう部屋(へや)の中にはたった三(み)まわり、輪(わ)になっただけしか、糸(いと)は残(のこ)っていませんでした。

お婿(むこ)さんが戸(と)の鍵穴(かぎあな)から出て行ったことが、これで分(わ)かりましたから、お姫(ひめ)さまはその糸(いと)をたぐりたぐり、どこまでもずんずん行ってみますと、糸(いと)はおしまいに三輪山(みわやま)のお社(やしろ)の中に入(はい)って、そこで止(と)まっておりました。

それではじめてお婿(むこ)さんが大物主命(おおものぬしのみこと)でいらっ

しゃったことが分(わ)かりました。そして糸(いと)が三輪(みわ)あとに残(のこ)っていたので、その山をも三輪山(みわやま)と呼(よ)ぶようになりました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年４月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
２００３年９月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。